



「前進あるのみ」の指導(上)

指導は単純そのもの

大相撲春場所は14日に初日を迎える。本来は大阪場所だったのが、コロナ禍のため5場所連続の両国開催となる。白鷹町出身の白鷹山(高田川部屋)は3年前の関取昇進時、目標力士に「故郷の英雄です」と柏戸を挙げた。糖尿病になり、新型コロナウイルスに感染するなど苦労があつて、十両に足踏みしているが、愚直なまでに前に出る押し相撲を貫く。腰の備えが整わず、相手にはたかれたり、回りこまれたりして負けることはあるが、自分からは決して引いたりしない。その辺りは師匠(元関脇安達彦乃島)の指導が徹底している感が



ある。同部屋の輝、竜電も自分からは絶対引いたりし海親方から言われたのは「前

ないからだ。

引退後、鏡山部屋を創設した柏戸も弟子への指導法はシンプルそのものだった。

直弟子の元十両・魄龍(67)は藤島地域出身は記憶をたどっても「前に出ろ」としか言われなかった」と

いう。振り返れば鏡山親方も現役時代、師匠・伊勢ノ

ことではない。技は巡業でも、出稽古でも先輩から見よう

見まねで学ぶのが相撲界なんだ」という。

どこで学んだかというところ春日野部屋への出稽古が多

かった。同部屋は横綱栃錦が率いたが、柏戸も現役時代よく出稽古に通った。そ

れもあつて自らが引退後は弟子たちをよく行かせてい

た。師匠栃錦をはじめ業師が多い部屋だった。栃ノ海

栃東、若嶋門、栃赤城…。魄龍は小兵の業師・蜂矢と

も親交を深めるなど、独力で技を覚えていったのだ。

安達(左)と小沼が十両昇進。2人に囲まれ喜びの鏡

山親方(75年夏場所後)

に出る」だけだった。師弟とも全く同じ指導理念だった。

技は自分で学ぶもの

魄龍は相手の懐に潜り込んで、内無双、外無双、さら

らに一本背負いなどを繰り返す業師ぶりで知られたが

「師匠からやり方を聞いたことは少ない。技は巡業でも、

出稽古でも先輩から見よう見まねで学ぶのが相撲界

なんだ」という。

どこで学んだかというところ春日野部屋への出稽古が多

かった。同部屋は横綱栃錦が率いたが、柏戸も現役時代よく出稽古に通った。そ

れもあつて自らが引退後は弟子たちをよく行かせてい

た。師匠栃錦をはじめ業師が多い部屋だった。栃ノ海

栃東、若嶋門、栃赤城…。魄龍は小兵の業師・蜂矢と

も親交を深めるなど、独力で技を覚えていったのだ。

安達(左)と小沼が十両昇進。2人に囲まれ喜びの鏡山親方(75年夏場所後)

楽に勝つこと戒める

鏡山も、その辺りは十分認識し、基本の前に出ること

とを口を酸っぱく言い聞かせた。はたいたり、楽に勝

つことを覚えると能力に壁ができる。伸びしろがある

のに、自ら限界を作ることだけはさせたくなかったの

だ。

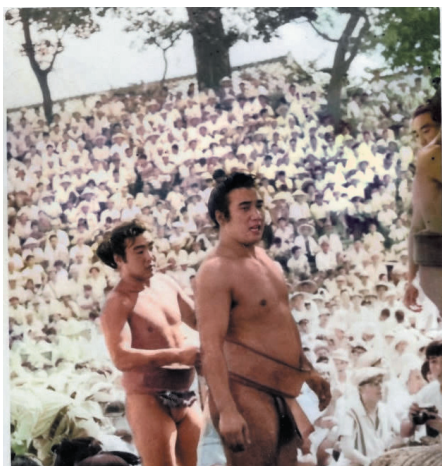
自分の若手時代も速攻相撲に磨きをかけ、出稽古でも

も突っ張り、ノド輪で相手の土俵で相撲を取ることだけ

を目指した。

稽古場を離れると「いい親方だったよ。細かいこと

につるさくは言わなかった」と弟子たちは口々に言う。



門限なども厳しくなく、その分、稽古場ではスパルタと言っているくらい厳しかった。

創設4年で関取誕生

それもあつて部屋創設丸4年の昭和50(1975)

年名古屋で関取誕生までこぎ着けた。山形市出身で日

大山形高3年中退し入門した22歳の安達(その後蔵玉

錦)と埼玉県春日部市出身19歳の小沼だった。その時

の親方の喜びは「協会に恩返しできた。自分は幸せ者

ですよ」と実感を込めた。

実際その通りだった。引退後も、糖尿病を抱えていたこ

ともあつて、部屋創設などを考えていなが

ったが、ライ

自分自身も巡業中の稽古で汗にまみれた。

大関時代、昭和35年の旧鶴岡市宮球場は、

最上部までギッシリ満員

バル大鵬との弟子育成競争を期待され、都内北小岩に部屋を創設した。長きに渡って築かれた角界の伝統を後進に伝えること。その一心だった。大鵬は引退も遅く一代年寄として「大鵬部屋」を築いたばかりだった

にせよ、大鵬より2年早く関取を出せた。順調な親方生活だった。しかし、思わぬところで育成につまずい

てしまった。

敬称略

(富樫 嘉美)

白鵬も決めた内無双

○…内無双は相手の懐に潜り込んで、出られて来る

ところを自分の手で内无七を下から払うようにひねり、

転がす技。相手の膝辺りを外から払うのは外無双。業

師が多いモンゴル勢では技のデパート・モンゴル支店

こと旭鷲山が内無双を得意にし、横綱・白鵬も決めた

ことがある。

毎週火曜日付に掲載